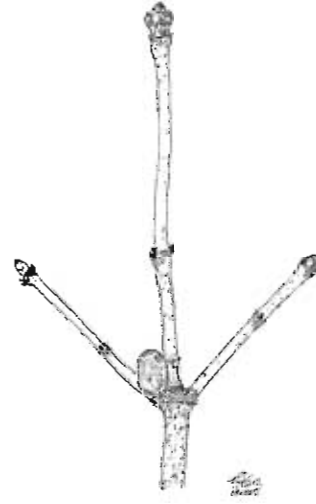


厳しい冬が過ぎ去って、林床に早春の草花が美しいカーペットを織りなす頃、イタヤカエデの梢の枯れ枝の冬芽はふくらんで、やがて柔い、産毛につつまれた掌状葉が折り畳まれたまま伸び出し、暖かい太陽の光を受けて開き、さらに展葉してゆく。かえで属の芽鱗は葉の基部が変態したもので、葉と同じように対生し、内側のものほど長く伸びる。芽鱗の起源はいろいろあり、托葉（ホオノキほか）の場合もあり、それを欠くもの（裸芽、オニグルミほか）もある。冬の間、枯れ枝にしがみついていたイラガのまゆも、芽吹きの際には成虫を送り出し、幼虫に柔い若芽を食べさせるであろう。



イタヤカエデの開葉



イタヤカエデの冬枝とイラガのまゆ

(防災科 斎藤新一郎)